



「桜上水の住宅」 撮影：アック東京

今月のトーク/monthly talk

周辺環境を考える

外壁のスリットから、花みづきの白い花と新緑がのぞいています。今回ご紹介する「桜上水の住宅」は施工会社にお勤めのご主人と、空間デザイナーの奥様のご夫妻の家です。敷地は、奥様が幼い頃ご両親と住んでいらしたところで、その後お引越しがされたため、駐車場として長い間更地になっていました。

「以前2人で住んでいた家は小さいけれども、人が大勢集まって楽しい家でした。ですから新しく建てるこの家も知人が気軽に集まることができる家にしたかったですね」という奥様。ご自身も空間デザインの仕事をされていますが、より自分たちのイメージを広げてもらいたいと、ジェネラルデザインの大堀伸さんに設計を依頼されました。

建物の南側は少し高くなっていて、道を挟んでアパートが隣接しているため、ある程度の高さまで外壁を設けないと視線が気になります。そこで完全に遮断することなく視界をさえぎるよう、外壁にくぼみを設け、その部分に木を植えました。壁の高さ、くぼみの大きさなどずいぶん検討を重ねられたということです。

ご主人は、「今まで広がった空き地にいったいどんな建物が建つか、近隣の方たちは気になったと思います。開口部が大きい建物なので、外に対してはプライバシーを守りたいけれども、かといってあまり威圧的なものだとやはり周囲には敬遠される。周辺環境にオープンにするとすると、クローズにするところの落とし

どころは、僕らだけでは難しかったと思いますね」と大堀さんの設計に満足しています。

また建物は3層8レベルの多層な空間になっています。「住んでみて、スキップフロアの心地よさを実感しています。例えば、1フロアをあがるのに、普通は階段がある程度上がらなければならないところ、ここではその半分上がってだけで済むでしょう。トイレにもバスルームにも、リビングから階段を数段上がるだけでいけるし、逆に上階の寝室からも半分下りていけば行ける。そういう関係性をそれぞれの機能を持つ部屋で楽しめる、面白いパズルをはめ込んでいただいたと思っています」という奥様。

そしてこの家の家具は、すべて奥様のデザインによるものです。「商空間だとそこに人がいるのは瞬間的なものだけれど、住宅だと滞在時間が長いので、進化させる余裕がないとだめだと思いました。全部作りすぎてはだめですね。それにこの家はあくまでも私たち二人の家なので、私個人の趣味を押し付けすぎると彼の居場所が悪くなってしまいます。二人のための空間づくりは楽しかったです」と付け加えてくださいました。

ゴールデンウィーク、植栽もようやく緑色に茂り、お客様の訪れを心待ちにしているようでした。

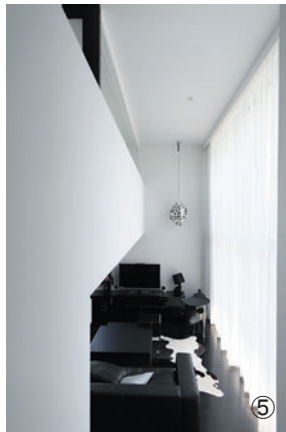
桜上水の住宅



8つのレベルが生み出した豊かな空間

クライアントは、クリエイティブな仕事を持つご夫妻であるが、意匠にこだわるといより、使いやすく収納量も確保されている、当たり前空間を望まれていた。しかし、クライアントの要求をそのまま反映させようとすると、空間を縦に3層つないだ、普通のコートハウスに落ち着きそうで、それだけでは面白くないと感じ、敷地に若干傾斜があることを利用して、微妙にレベルをずらして、建物の内側、外側を合わせて8つのレベルを設けることにした。そうすることで、床で作られた上下関係の内も外も絡みながら、豊かなひとつつながりの空間が生まれてきた。来客を迎え、パーティをしたいという中庭を中心に、オーソドックスでありながら多様な空間体験を可能にすることができた。

また、これまで僕のプランは周辺に対し外壁でしっかり閉じるものが多かったが、今回の周辺環境は、ごくありふれた住宅街で、木造の住宅やアパートが多く、化粧打ち放しコンクリートより、もっとラフでぼやけた感じの柔らかいコンクリートの方がなじむような気がした。普通合板型枠による打ち放しのグレーの外壁から、内側の真っ白い壁が見え、さらに一部を切り取るようにあけて、植栽で建物内部への視線を遮る程度にしておくことで、通風や採光をある程度維持しながら、プライバシーやセキュリティを確保することができた。外壁も90度ではなく、少し開いて振ってやり、ゆるい形に落ち着いている。時間の経過でより周辺に溶けこんでいくことだろう。(大堀伸氏 談)

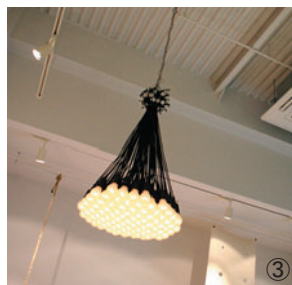


所在地：杉並区
用途：専用住宅
構造：RC造
規模：地下1階、地上2階
構造設計：我伊野構造設計室
設備設計：ZO設計室
家具デザイン：長谷川喜美 / ベルベッタ・デザイン
施工担当：佐藤健一郎
竣工：2008年3月
撮影：アック東京

※この作品は「新建築『住宅特集』265号 2008年5月号」に掲載されています。どうぞご覧ください。

①南側外観。中庭から見た建物。地下1階は仕事部屋、右側が建物入口。左手からテラスに上がり、正面1階がリビング、2階は寝室になる②2階リビングのテラスからみた中庭。外壁のくぼんだ箇所の花みづきの木が、向かい側のアパートからの視線を遮る③リビング。奥様のデザインした家具は黒と白を基調としている④大きなサッシを開け放しテラスと一体になったバスルーム。奥は洗面スペース⑤2階への階段踊り場から見た、1階リビング。左手は2階寝室。ガラスで仕切って音は遮断するが中庭の景色はみえる⑥東側の地下通路から西側の壁を臨む。正面にM1階の書斎の窓。その上の壁の開いた空間がバスルームのテラス。

droog design 恵比寿ショールーム改修工事



ドロッグデザイン、オランダ国外初のショールーム、6月6日にオープン

1993年、オランダで提唱された「デザインの基準」ドロッグデザインは、使用者にポジティブなインスピレーションを与えるよう、シニカルなユーモアが込められたものや活動を総称したものです。オランダだけでなく、世界各地で賛同するデザイナーが携わり、多数のプロジェクトを展開してきました。このたび、発起人のハイス・バックカーとかねてから関わりのあった「ギャラリー・ドゥボワソン」と提携して、日本にも活動拠点が設けられることになりました。今回オープンするショールームでは、作品と触れ合うだけでなく購入することもできます。1度ご覧になってみてはいかがでしょうか。

①棚には、くぼみのあるボウルや試験管のようなドレッシング容器など日本初公開の作品が並び②いつでも木渡れ目を味わえるレースのパラソル。奥に見えるラグチェアは、思い出の古着や毛布で作ったもの③85のランプを集めたシャンデリアは、MoMAの永久展示品コレクションに収蔵されている。

所在地：渋谷区恵比寿2-4-2 TEL：03-5795-1889
営業時間：12:00~20:00pm(金・土)
改修設計：大堀伸/ジェネラルデザイン



撮影：アック東京

—今回は空間デザイナーの、長谷川喜美さんにご登場いただきます。学校を出られて最初はどのような形でお仕事を始められましたか。

長谷川：桑沢デザイン研究所を出て、最初は店舗やイベント、展示会の施工を行なう会社にデザイナーとして入社し、12年勤めました。チーフクラスになった頃、外部のデザイナーの方から新デザイン事務所の設立メンバーのお誘いを受け、1年近く迷った結果参加することにしました。両会社とも店舗設計や、ディスプレイ、イベント、プロダクトデザイン等様々な仕事を手掛けました。普通、住宅やアパレル、飲食等の専門分野ごとで仕事をする人が多いですが、私は領域を限定しないで、空間全般を扱う仕事に携わってきましたね。最近は空間だけに止まらず、ロゴ、web、パッケージいわゆるブランディングも手掛けています。

—どうして、可能だったのですか。

長谷川：最初に入社した施工会社が面白い会社で、カテゴリーにとらわれず、店舗や展示会、イベントのデザイン等を、幅広くやらせてもらいました。九州沖縄サミットのアートディレクションや天皇在位10周年のステージデザインも手掛けました。そういう意味では、とても恵まれた環境で仕事をさせて頂けたことを今でも感謝しています。私の仕事は、建築でもインテリアでもない。テンポラリーもパーマナントも関係ない。場の“空気”を生み出す仕事だと思っています。どの仕事も“空気”を作り出すということでは同じです。これからも様々なジャンルの仕事を手掛けたいと思っています。

—ホームページなどでお仕事を拝見していると、自由にデザインされた中でも、女性らしさが感じられるものをお見受けしますが、ご自身ではご自分の仕事をどのようにご覧になっていますか？

長谷川：女性デザイナーは多いのですが、独立して事務所を構え、スタッフを抱えている人は少ないですね。それだけ覚悟をしている女性デザイナーはまだ希少ということですね。ですから女性ならではの視点というのは、1つの財産なので大事にしています。ただ良いデザインに男女は関係ないので、特に女性であることをメインに考えたくはないと思っています。「ネイルサロン」など、クライアントからの女性らしさの要望があればそういうデザインを心がけますが、私のデザイン自体はわりとシャープな感じですよ。

今回ご登場いただく長谷川喜美さんは、商業空間、イベント、エキシビションなどの空間デザイン全般を幅広く手がけるデザイナーです。女性では珍しく、個人事務所を設立されており、昨年は新型自動車の発表イベントに次代を牽引する3人の女性クリエイターとして参加しています。

このたび弊社施工によるご自宅の新築にあたり、お話を聞かせていただきました。

Kimi Hasegawa

2004年、「ベルベッタ・デザイン」を設立。商業空間、イベント、エキシビション等の空間デザイン全般を幅広く手がける。近年では、2007年ミラノサローネで「TOKYO DESIGN PREMIO」や表参道ヒルズのクリスマスインスタレーションなどの空間をデザイン。プロダクトデザインでは、2004年にコンストラクトファニチャー「MABURI」を、2007年にミラノサローネにて「東京蝶々」を発表。また2007年夏には、新型自動車マツダ デミオのデザイン展示イベントで、「東京蝶々」を使ったインスタレーション空間『私とデミオと東京蝶々』を発表。東京デザイナーズウィークにも出品している。

—今回のご自宅の家具のデザインもなさったと聞いています。

長谷川：そうですね。ガラスの食器の入っているガラスボード、ダイニングテーブル、ソファ、ベッド、スリッパ等々まで全部自分がデザインしたものです。自分の好きなものに囲まれていたいんです。—地階の仕事部屋でも拝見しましたが、テーブルのコーリアン（人工大理石）天板の上に蝶々のオブジェが組込まれるようになっていて、まるで溶けこんでいるかのような印象をうけました。

長谷川：ミラノサローネで出品したものと同じシリーズのものですが、普段は取り外して、パズルのように穴の形に合わせたピースを埋めて、フラットに使うことができます。

—今後、お仕事としてやっていきたいものがありますか？

長谷川：やはりカテゴリーは問わず、様々なものに挑戦していきたいと思っています。この『東京蝶々』という作品づくりもそうですが、ミラノサローネで発表して、その後広げる方法を考えるようになりました。いわゆるプロモーションですね。作品を作ることによって、今までにない新しい視点を持ってました。デザインでもこれまでの店舗家具デザインはその空間のためだけのデザインでしたが、プロダクトは様々なシチュエーションを考えてデザインするのが新鮮でした。

もちろんまったく新しいことに挑戦したい気持ちは強いですね。事務所の現在のスタッフもいろんなことを学んできた人間が集まっています。建築やインテリアだけでなく、プロダクトデザインや日本画を勉強してきた子もいるんです。彼らの新しい感覚を取り入れながら、さらなる“空気”を生み出していきたいと思っています。

—本日はありがとうございます。

「私の仕事は場の“空気”を生み出すこと。
多くの出会いを糧に明日の“空気”を生み出したい」

長谷川喜美

東京生まれ。桑沢デザイン研究所卒業。
施工会社入社、その後新デザイン事務所設立に参加。
2004年「ベルベッタ・デザイン」設立。日産デザインセンター / ブランド戦略室の内装デザイン、ネイルサロン等の店舗空間デザイン、表参道ヒルズ各種イベントの空間デザインを担当。ディスプレイ産業大賞【通商産業大臣賞】/ ディスプレイデザイン奨励賞等多数受賞。
<http://www.velveta.jp/>

ご自身のデザインされたカップボードにたくさんのグラスが並ぶ。手前は蝶々のオブジェが埋め込まれたダイニングテーブル。

※前号で予告させていただきました渡邊春吉様には次号以降にご登場いただく予定です。お詫びして訂正させていただきます。



第39回ストアフロントコンクールで「JM335」が金賞受賞

商業施設の建物正面（ストアフロント）を彩る、様々なアルミ建材の開発・販売を手がける昭和フロント(株)が、毎年開催している「ストアフロントコンクール」はいまや商業施設のファサードデザインをリードする歴史と権威のあるビックイベントになっており、今年で39回目を迎えました。

このたび、弊社で施工した神宮前の「JM335」（設計：関根裕司/㈸アルボス、2007年5月竣工）が、応募総数1500を越える中から、「第3部住宅・オフィス・公共部門・その他」部門において、見事金賞を受賞。5月13日セルリアンタワーで行なわれた授賞式に、設計の関根裕司氏、加工の㈸東洋技術開発担当者の方とともに、弊社現場担当主任の寺井、次長岩泉が出席しました。

昭和フロント(株)滝原秀器社長の冒頭挨拶によると、建築確認申請の問題や建設資材の高騰の影響で、今年は応募点数が少なかつたとのこと。それでも1500を超える作品が、毎年のように寄せられているということですから、商業施設を作り上げる技術者、設計者の皆様への長年の貢献度がうかがえます。

また審査委員長の八木幸二氏（東京工業大学大学院理工学研究科教授）は、全体の講評で「ファサードを見せるという点で、出品は地方の大型店舗が多くなるが、ガラスファサードで見せるだけでなく、既製品のよさを保ちながら、より可能性を広げるものを期待したい」と語っていました。

アルボスの関根裕司氏は、受賞の感想を求められて「予算をオーバーしそうで、既製品で何かデザインのいいものがないか、と探しているうちに昭和フロントのサッシに出会いました。足場を払うまでは心配でしたが、出来上がったときの驚き、既製品でここまでできたということで大変うれしく思いました。単純なものだけに、施工では大変な努力が必要で現場担当者に感謝しています。この形をまた次でも展開したいですね」と振り返っていらっしゃいました。



写真⑥⑦⑧撮影：齋部功



JM335（ShinClub89 に掲載）

押出成型セメント板とガラスサッシの市松模様が個性的なこの建物は、神宮前3丁目交差点の奥まった場所にある。「クリエーターやアーティストの多い地域だが、全面ガラス張りのようなインパクトのある外観より、ニュートラルでかつ単純な構成のファサードにしたかった」と関根氏。サッシの厚みを感じさせないすっきりとした印象が、受賞につながった。

①写真中央は受賞の感想を述べる、設計の関根裕司氏。向かって左側に弊社寺井、東洋技術開発担当者様②会場のセルリアンタワー地階ホール③特別審査委員の先生方。左から八木幸二氏、橋本夕起夫氏、牛建務氏④受賞の盾を手に記念写真。左から、弊社寺井、設計の関根裕司氏、東洋技術開発担当者様⑤昭和フロント社長から盾を授与される寺井⑥JM335夜景⑦昼景⑧1階外側通路。サッシは枠の見付35ミリに対し付枠を設け、20ミリにしか見えない工夫が施され、個性的な開口部を生み出した。

TOPICS/INFORMATION

「神宮前H邸 新築工事 地鎮祭 5月2日



都心の閑静な住宅街に建つ、二世帯住宅です。

構造:RC造
規模:地下1階 地上3階
用途:専用住宅
設計:村田靖夫建築研究室

「神山町ビル 新築工事」 地鎮祭 5月14日



山の手、松涛の閑静な住宅地と、商業地域との境目に建つ店舗ビルです。

構造:RC造
規模:地下1階 地上3階
用途:店舗
設計:中村一雄/セレスティアソシエイツ

編集後記

・中国四川省の大地震のニュースは、私たちに改めて耐震性の低い建物が引き起こす悲劇を想起させてくれました。一刻も早い犠牲者の救出を祈っています。

(株)ユニホー辰カンパニー通信 Vol.98 発行日 2008年5月16日 編集人:松村典子 発行人:森村和男